

## 発言する医師、改革する医師

HBC 北海道放送  
報道局報道部

山崎 裕侍

忘れえぬ2人の医師がいます。

一人は村上智彦医師。2007年に夕張市立診療所の所長となり、財政破綻した夕張の医療を立て直そうとしました。マスコミに取り上げられることも多かった医師です。白血病を患い、去年亡くなりました。

夕張は日本の地域医療が抱える問題の縮図でした。住民は都市部の大病院にかかり、地元の診療所に通う人はあまりいない。一方で軽症にもかかわらず時間外に受診する“コンビニ受診”が繰り返され、救急車をタクシー代わりに使うケースが絶えない。地域の医師は過重労働となり、倒れる寸前にもかかわらず、行政も議会も問題には目をつむったまま。住民は「医師は寝ないで診るのは当たり前」とうそぶきながら、自らは健康に気を使わずたばこや酒をやめようともしない。これまで地方に医師を派遣していた大学の医局の力は落ち、「地域医療はこき使われて大変」というイメージが広がることで、研修医は待遇の良い都会の民間病院を研修先に選ぶ。まさに悪循環です。

村上医師が取り組んだのは予防医療でした。自分の健康は自分の問題として、葉ばかりに頼らず、食生活を見直し、運動を心がける。患者に諭すように診察するとともに、行政や医療スタッフにもその取り組みを求めました。財政破綻する前のような医療水準の維持を求める議員に対しては「このままの意識では第二の破綻を迎える」と舌鋒鋭く訴えました。どん底だった夕張の医療の改革に取り組んだ結果、医療スタッフや住民の意識が大きく変わり、市の医療費も大幅に減りました。診療所には夕張の医療を学びたいと全国から医師が集まりました。

休みもとらず、自らの生活も犠牲にしながら医療に人生を捧げる医師の象徴である「赤ひげ先生」。しかし現実の医師たちは口をそろえて言います。「赤ひげ先生にはなれない」「赤ひげ先生の時代は終わった」と。悲鳴をあげる医療現場、あるいは一人で懸命に地域医療を支える医師の姿はこれまでたびたび報道されていました。私は村上医師への取材によって、医療は制度や技術だけではなく、意識の問題だと目を見開かされました。

二人目は鹿野恒医師。市立札幌病院救命救急センターの医師で、その後、新たな地での活躍を目指し、

市立病院を退職しました。鹿野医師と出会ったきっかけは臓器移植の取材でした。2006年、私は臓器移植のドキュメンタリー番組の取材のため、北海道医師会で開かれた講演会に参加しました。発表者の一人だったのが鹿野医師でした。鹿野医師の話は、それまでの臓器移植のイメージや知識を完全に覆すものでした。北海道は心停止後の臓器（腎）提供で全国でも最多。一方で市立札幌病院では心肺停止で運ばれてきた患者の生存率が世界でもトップクラスでした。臓器提供と救急医療、この一見相反するものが両立しているというのです。市立札幌病院では救急現場にPCPS（人工心肺装置）を導入しました。本来は心臓の外科手術の際に用いられるPCPSを、鹿野医師は救急の現場に取り入れました。そうすることで心肺停止になった患者でも脳に血液を循環させることによって脳へのダメージを少なくすることができます。原疾患はその後しっかりと治療すればいいのです。脳外科が専門の鹿野医師ならではの発想でした。その一方で、どれだけ手を尽くしても助からない人がいます。そんな患者や家族に真摯に向き合う鹿野医師の姿を取材で何度も目にしました。患者家族と向き合うことは、臓器提供とつながっていました。「夫は生前、臓器提供したいと話していた」「優しい母の性格なら臓器を誰かに使ってほしいと思うはず」。実はそう考える家族が少なくありません。しかし医師に相談するタイミングが分からず、申し出たときには医学的に提供ができない段階に至ることも多いのです。鹿野医師や医療スタッフなどの懸命な救急医療と、臓器提供の選択という丁寧な説明が、救急医療と臓器提供と両立させている理由でした。

鹿野医師はよく私に話していました。

「医療にはキュアからケアに移る瞬間がある。助けられないことを率直に伝え家族の決断を信じる。僕は臓器提供をたくさんしたいわけではない。きちんと医療者としてキュアもケアも向き合った結果、臓器提供を選択する家族が多い」

2人の医師に共通していたのは、社会に開かれていたことです。医師が病気の治療や最新の医療技術に向き合うのは最もなことです。しかし医療をめぐる現状を変えようとするとき、そのチカラは社会に向かって開かれなければなりません。これまでの取材であんなに発言する医師を見たことはありませんでした。これまでの取材であんなに強い意志で常識を打ち破る医師と会ったことはありませんでした。そんな医師を応援し、光を当てる報道がこれからの時代さらに必要なのかもしれない。

プロフィール 1971年生まれ。日本大学文学部出身。2006年HBCに中途入社。医療・福祉を中心に取材し、ドキュメンタリー番組も制作。主なものに『命をつなぐ～臓器移植法10年・救急医療の現場から～』2007年（第49回科学技術映像祭内閣総理大臣賞）、『赤ひげよ、さらば。～地域医療“再生”と“崩壊”の現場から～』2009年（第5回日本放送文化大賞グランプリ）。